

順送り訳のための概念操作 -英日同時通訳における指示表現の追加-

石塚 浩之
(広島修道大学)

Abstract:

As simultaneous interpreters need to process information according to the input order of the source text, simultaneous interpreting takes the form of a progressive translation, a translation style that progresses alongside the source text and maintains the same order of information in the target text. During simultaneous interpreting between English and Japanese, syntactic differences between the two languages impose extra efforts on interpreters. To explore the conceptual operations taking place in the progressive translation process, this paper focuses on the additional translation of demonstratives with no corresponding expressions in the source text. Drawing on the CC model (Funayama, 2007; Ishizuka, 2013), it will examine the role of such demonstratives and the conceptual operations to generate them. While additional demonstratives seem to benefit progressive processing, the phenomenon is not exclusively observed in connection with overcoming syntactic differences in progressive translations. Based on evidence from recorded interpreting performances, this paper suggests that the conceptual operations required to produce additional demonstratives are part of the general cognitive mechanisms at play in online discourse processing. The addition of demonstratives seems to be an expression of both the incremental global aspect and the consecutive local aspect of discourse processing.

1. はじめに

同時通訳は、起点テキスト (source text: ST) の時間の流れに沿ってオンラインで目標テキスト (target text: TT) を生成する作業であり、順送りの作業が必須である。しかし、ST から TT へのコード的置換によってこれを実現することは難しく、実際の同時通訳記録をつぶさに観察すると、コード的置換では説明できない訳例が数多く見つかる。こうした例は単なる訳出のゆらぎ

Conceptual operations for progressive translation: The additional translation of demonstratives during simultaneous interpreting from English into Japanese. Published online: March 31, 2021 *MITIS Journal* vol. 2 no.1 (2021), pp.11-32.

ではなく、通訳作業の背後にある認知処理を探るための貴重なデータとなる。本稿は、理論的枠組みとして CC モデル (Funayama, 2007; Ishizuka, 2013) を採用し、同時通訳記録の質的分析により、通訳作業の背後にある概念の働きを跡づける。そのため、同時通訳における言語的特徴のひとつとして ST に等価的要素のない指示表現の TT への追加に注目し、順送りの訳を実現する認知処理を記述し、これが同時通訳一般において持つ意義について論じる。

第 2 節では同時通訳における指示表現の追加についての先行研究を振り返り、本研究の位置づけを示したうえで、本稿の理論的枠組みを明らかにする。第 3 節では通訳データベース (JNPC コーパス) 収録の同時通訳記録の観察から、ST に等価的要素のない指示表現の追加が同時通訳において果たす役割を順送り訳という観点から分析する。第 4 節では、この現象を手がかりに同時通訳の認知処理の特徴を考察し、順送り訳の背後にある概念操作は二言語間の統語的差異の克服に特化したものではなく、同時通訳における一般的処理であることを主張する。さらに、この操作を逐次的・局所的処理と漸進的・全体的処理という二つの面から整理し、こうした処理を可能とするコミュニケーション・モデルを概観する。最後に第 5 節では本稿のむすびとして、同時通訳の認知的側面について本稿で得られた知見をまとめ、言語的特徴を手がかりにした同時通訳の認知的研究の可能性を示す。

2. 本研究の位置づけと理論的前提

ここでは英日同時通訳の訳出において原発話に対応する言語的要素のない指示表現が追加される現象に関する先行研究を振り返り、本稿の位置づけを明らかにする。また、本稿の分析の理論的枠組みとして、CC モデルを踏まえた順送り訳のとらえ方を整理する。

2.1 通訳者による独自の照応関係の構築

日英間の同時通訳において、同時通訳の訳出に原発話に等価的要素のない指示表現が現れることは珍しくない。船山 (2000) は、独自の照応関係の構築という観点からこの現象に注目し、これを通訳者による「概念的まとめなおし」の表れととらえ、指示表現以外の照応関係も含め、通訳作業における概念レベルの処理の介在を指摘した。南津 (2002) は、英日同時通訳において同様の現象に注目したが、これは関連性理論を援用し、訳出に見られる追加表現の意義を論じる試みであり、通訳の聞き手の立場からの訳出のわかりやすさについて論じたものであった。これは通訳者の認知についての考察ではなかったが、同時通訳記録の質的分析による通訳研究の可能性の広がりを示すものであった。

石塚 (2016) は通訳者の認知処理の観点から、この現象を考察し、船山 (2000) で指摘された「概念的まとめなおし」が同時通訳作業において持つ意義を考察した。ここでは、原発話にない指示表現の追加の背後にある認知処理とその意義として、情報ユニットの構築、ST の理解における役割、TT の産出における役割の三点を指摘した。本稿では、この考察をさらに進め、順送り訳という観点から ST にない指示表現の追加的訳出について考察したうえで、こうした指示表現の訳出の背後にある認知処理が同時通訳において果たす意義の一般化を試みる。

2.2 分割と訳出単位

同時通訳者は ST の情報を時間の流れに沿って順次訳出する。訳出に順序があるという判断は ST が複数の断片に分割されることを前提とする。多くの場合、この分割作業は単語よりも大きく文よりも小さい単位で実行される。書記言語の翻訳においても、同様の事情はある。まとまった長さを持つ ST 全体を一気に翻訳することは不可能であり、翻訳作業は必ず ST の断片から TT の断片へとなされる。通訳者・翻訳者は、ある ST の断片から目下の訳出作業に必要な情報を得ている。通訳翻訳における訳出単位 (translation unit: TU) は、「チャンク」、「意味のまとまり」などの用語で語られてきたが、その定義は論者により異なる。Lederer (1978/2002) は、これを「意味の単位」という言い方で、短期記憶内の複数の語が認知資源と融合することにより構築されたものとしている。ここでは、いわゆるパリ派の「意味の理論」の立場より、意味の単位の非言語性が主張されている。一方、Viney & Darbelnet (1995: 21) は、翻訳は意味の領域で実行されるとしながらも、「訳出単位」は発話の最小単位であり、「思考単位」、「語彙単位」と同じものであるとし、あくまでも言語形式を中心に据えた分析を展開している。

本稿では、同時通訳の認知プロセスにおける非言語的な操作を記述するため、理論的枠組みとして CC モデルを採用し、ST の言語情報、そこから構築された心的表示、産出された TT の言語情報を区別する。CC モデルでは、通訳者は ST からの言語情報を手がかりに概念レベルでの心的表示である概念的複合体 (conceptual complexes: CC) を構築し、これを表現するために TT を産出するものと考えられる。これに基づき、順送り訳の仕組みを記述するならば、通訳者は時間の流れに従い ST を断片化し、起点切片 (source segment: SS) とし、これを資源とし TU を構築する。TU は通訳者の構築する概念の一部であり、CC モデルで記述できる。さらに、通訳者は、ここから目標切片 (target segment: TS) を産出し、この集積が全体として一貫性のある TT となる。図 1 は、本稿の基本的な考え方についての模式図である。

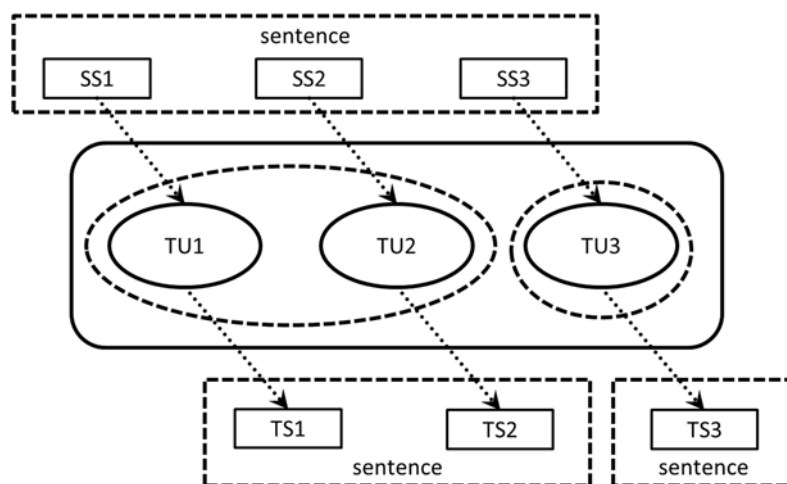


図 1 CC モデルにおける順送り訳

図 1 は、ST の入力から TT の産出に至るまで通訳者の認知環境で実行される作業を表す。

図の上部にある点線の長方形は ST に含まれる任意の文が通訳者に与えられた様子を表す。通訳者はこの文の終わりを待つことなく、文の途中で訳出を始める。図 1 では左から右に向かい時間が流れており、SS1、SS2、SS3 は、通訳者がこの 1 文を三つに分割し処理したことを示す。次の段の内部の角の丸い長方形は、通訳者の意味構築を表し、この ST の処理に当たり通訳者が構築した概念の全体を指す。その内部には三つの起点切片に対応する訳出単位として TU1、TU2、TU3 が、順次、構築されている。そして、これらが順送りに目標切片として訳出され、TS1、TS2、TS3 となる。ここで概念的な処理を経るため、ST の統語構造が TT に再現されるとは限らない。ここでは訳出にあたり文法単位の変更が起こり、ST の 1 文が TT では 2 文に訳出されたことを示している。通訳者の概念内部の破線の楕円は、訳出における産出計画で TU1 と TU2 が 1 文の情報として準備され、TU3 が別の文のための情報として処理されたことを示している。すなわち、この 1 文の処理において通訳者は SS1 を聞いた段階で ST の文の途中から訳出を始め、SS2 までを聞いた時点で TU1 と TU2 の二つを資源とし TT の 1 文を産出した。一方、三つの TU はすべて ST を理解するための概念全体に含まれている。図 1 では 1 文の処理しか表現していないが、1 文ごとにひとつの概念が構築されるのではなく、ST 全体の処理を通じてひとつの概念が構築される。

図 1 は同時通訳において構築される心的表示の全体像を示そうとしたものであるが、このうち、通訳者に自覚されるものは、通常、SS と TS のみであり、TU が直接的に意識に上ることはほとんどない。意識的な処理としては、TS1 を産出してしまえば SS1 は不要となり、次は SS2 に焦点を合わせ TS2 の産出を実行する。処理済みの言語表現は捨て去らねば、次の表現の処理に認知資源を投入することはできない。しかし、断片化された表現を、順次、処理し、捨てていくとすれば、ST 全体の一貫性はどのように把握され、TT 全体の結束性はいかにして実現されるのだろうか。図 1 では概念レベルの処理がその役割を担うことを示唆しており、TU の構築はこの処理と関わりを持つ。ただし、これは意識の届かない水面下で実行される。

TU は単に ST の言語情報の集積ではなく概念の一部である。図 2 は構築資源の観点から言語情報としての SS と概念(CC)の一部としての訳出単位の関係を示したものである。

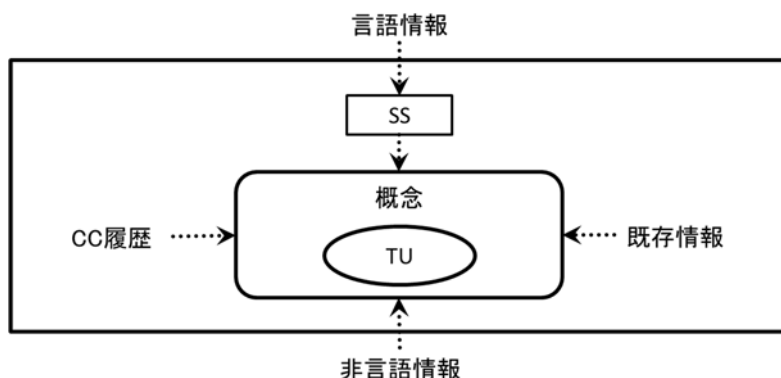


図 2 訳出単位 (TU) の資源

図 2 における大きな長方形は通訳者の認知環境の全体を表す。概念構築の資源となる情報は、その由来と性質により 4 種類に分けられる。外部由来の情報としては言語情報と非言語情報の 2 種類がある。言語レベルの処理は語彙・統語に関わる情報を担う。情報構造は言語形式に随伴するが、語彙・統語を超えた理解であるため、本稿では、情報構造に基づく処理を一般的な認知原則に従う概念レベルでの処理に含める。非言語情報には通訳現場からの情報や原発話者の身振り、表情なども含まれる。SS は原発話の音声情報を分割することで得られるが、この分割には通訳者による高度な判断を伴う。したがって、SS は言語情報であるが、直接的に外部からもたらされるものではなく、通訳者の認知処理によって作り出される。

内部由来の情報は、SS を処理にするにあたり、通訳者の認知環境に存在した情報であるが、これは通訳者の持つ世界知識や認知資源、当該案件の事前準備により学習した情報の他、ST の先行部分から構築された概念、すなわち CC の履歴が含まれる。これにより、先行する TU は後続する TU の構築資源ともなる。本稿では ST に等価的要素のない指示表現の追加を手がかりに、順送り訳の背後にある認知処理を TU の操作という観点から探る。

3. 同時通訳における指示表現の追加

ここでは実際の通訳記録を観察し、指示表現の追加が同時通訳の認知処理において何を示すかを具体的に分析する。なお、本稿で使用したデータは通訳データベース(JNPC コーパス)¹に含まれる同時通訳記録のうち、2012年3月16日に日本記者クラブの主催で行われた同時通訳記者会見のパスカル・ラミーWTO 事務局長のメインスピーチ部分である²。なお、この記者会見では原稿なしのスピーチに対する同時通訳が行われた。

3.1 統語的差異克服のための指示表現追加

まずは関係詞の処理のために ST に等価的要素のない指示表現が訳出に表れた例として (1) の「それ」(J020) に注目する。

(1)

E 019 And this is consequence of a crisis which severely bites into

J 019 の首脳というのは今どうしても オー 国内のアジェンダに目が行きがちになっています。

E 020 economic social fabrics that reverberates in political turbulences which obliged

J 020 マ 現下の 危機 というのは まさに各国の経済 エ 社会の根本を を揺るがして それによって

E 021 national leaders to focus on their issues at home. And they have

J 021 エー 政治 的な混乱が生じている ということで エー 各国レベルの首脳はどうしても内政に

E 022 as a consequence of that less availability less energy in order to enter into

J 022 エー 目を 向けがちであります。その結果どうしても オー 各国の アノー首脳レベルでは

英語から日本語への順送り訳において話題となる典型的な例として関係詞を含む文がある。

英語の関係詞節は被修飾語である先行詞の修飾節となる。修飾節と被修飾語という統語的關係を保持したまま、この英文を日本語に訳そうとすると修飾節と被修飾語の配列を逆転させることになる。こうした場合、英語と日本語の間には統語的な鏡面関係がある。関係詞を含む英文を順送りで日本語に訳すなら、この鏡面関係を乗り越える必要がある。そのためには、英語において修飾と被修飾という関係でとらえられていた二つの項目の関係を再構築せねばならない。

(1) の ST では “which” (E019)、“that” (E020)、“which” (E020) に関係詞が 3 回連続で出現している。「それ」(J020) は “that” (E020) の処理のために貢献している。なお、このデータでは同時通訳における ST の発話と TT の産出の時間的対応関係が表現されている。訳出表現は通訳者の認知の反映である。したがって、訳出表現の統語的まとまりから TS を特定し、これを手がかりに SS を推定することができる。表 1 は (1) における SS と TS の対応関係を示したものである。ここでは、それぞれの SS および TT に対応する TU を番号で区別している。(1) と表 1 より、SS と TS の訳出のタイミングと言語的特徴を照らし合わせることで、それぞれの訳出時点における TU の状態を跡づけることができる。なお、対応表における SS と TS は表の左端の番号で区別する。

	SS	TU	TS
1	And this is consequence of a crisis	TU1	現下の危機というのは
2	which severely bites into economic social fabrics	TU2	まさに各国経済の根本を揺るがして
3	that reverberates in political turbulences	TU3	それ によって政治的な混乱が生じていると いうことで
4	which obliged national leaders to focus on their issues at home	TU4	各国レベルの首脳はどうしても内政に目を 向けがちであります。

表 1 (1)における SS と TS の対応

ここで表 1 の ST と TT の統語的關係を整理しておこう。ST のこの部分においては、SS1 が主節であり、SS2、SS3、SS4 はすべて関係節として、先行部分を修飾している。一方、TT では、TS1 と TS2 が主述関係をなし、全体としてひとつの節を構成しており、TS3、TS4 はそれぞれ独立した節をなしている。ST にあった連続的な修飾関係は TT においては一切見られない。通訳者は ST に含まれていた修飾・被修飾という統語構造を破棄し、別なとらえ方で再構築したことになる。ここではどのような概念的処理が行われたのであろうか。(1) における順送りの処理を順に見てみよう。

TS1の訳出タイミングは SS2 と重複していることから、通訳者は SS2 を聞き、TU2 を構築しつつ、TS1を産出したことが分かる。TS1の「現下の危機というのは」(J020) は主部として訳出されていることから “which” (E019) は TU1 を主題化することで処理されていることが分かる。おし

なべて先行詞と関係節の関係はテーマ・レーマ構造を反映すると考えれば、この訳出は当然かつ妥当であるが、ここでは SS と TS が統語的置換関係にはない点が重要である。ここではコード変換を超えた組換えを経て、TS1 と TS2 が産出されている。これについては 4.3 で再考する。図 1 は TS1 産出時点の TU の状態を示している。

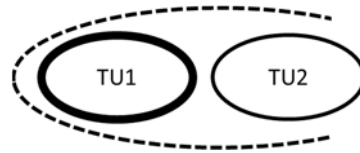


図 1 (1)の TS1 産出時の TU

TS1 の産出時点では、すでに TU2 構築は進んでおり、通訳者の認知環境には TU1 と TU2 の両方が含まれている。TU1 が主題としてとらえられていることから、後続部分を述部としてとらえようとしていることはわかるが、まだどこまでを統語的な区切りとするかは確定していない可能性もある。そのため、統語的なまとまりの判断材料となる破線は開放されている。訳出は TU1 からなされているため、TU1 と TU2 の活性状態には差があり、TU1 が強調されているのは、この時点で訳出に使用されている TU1 のほうが活性度が高いことを示す。

次に図 2 は TS2 産出時の TU の状態を示している。TS2 は「揺るがして」(J020) と節の切れ目を示していることから、TS2 の訳出時点では TU1 と TU2 は二つで一つのまとまりとしてとらえられていたことが分かる。ふたつの TU を囲む破線の楕円は、このまとまりを示す。TS2 は TU2 から産出されているため、破線内部の活性状態は TU1 から TU2 へ移っている。また、TS2 は SS3 を聞きながら産出されていることから、すでに次の TU3 の構築が始まっている。

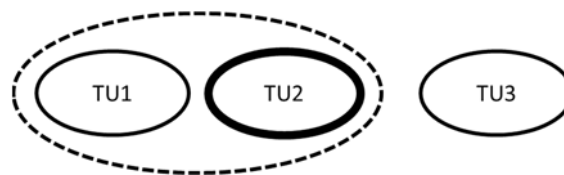


図 2 (1)の TS2 産出時の TU

TS3 には (1) の訳出の最大の注目点が含まれている。SS3 の “that” (E020) によって導かれる関係詞節であり、統語的には先行詞 “economic social fabrics” (E020) に対する修飾部であるが、この関係は「それによって」(J020) として処理されている。ここでの注目点は二つある。ひとつは ST に等価的要素のない指示表現が現れていることであり、もうひとつはこの関係が因果関係として処理されていることである。まず、この「それ」(J020) は ST に等価的要素のない指示表現の追加である。この「それ」の指示内容は「危機が経済・社会を揺るがしていること」である。この内容を通訳者はいかにして保持しているのだろうか。これを英語で保持しているとすれば SS1 および SS2 の表現が保持されていることになる。訳出言語である日本語で保持して

いるとすれば、TS1 および TS2 の表現が保持されていることになる。いずれにしても、これらの保持が SS3 から TS3 への変換と同時になされねばならないとすれば、言語形式の保持はかなりの負担となる。TU を想定することにより、ここで通訳者は TU1 と TU2 の内容を保持し、ひとつのまとまりとしてとらえつつ、“that” (E020) の処理を行っていると説明できる。つまり、ここでの指示表現の追加は複数のセグメントから得た情報からなる情報ユニット (石塚, 2016) ととらえることができる。形式と内容の保持よりは、内容のみの保持のほうが情報量は少ないため、認知負荷軽減の点で有利である。

また、「それによって」(J020) は因果関係を表すが、この情報は ST に示されていない。つまり、通訳者は ST に非明示的な論理関係を独自にとらえているのである。論理関係とは、常に命題と命題の関係であり、この理解には複数の命題の把握が前提となる。TS3 の産出は SS4 を聞きながら実行されているため、TU4 の構築はすでに始まっているが、通訳者はここで TU1 および TU2 からなる命題も保持し、TU3 と参照しつつ、この論理関係を把握したことがわかる。図 3 はこの時の TU の状態を示している。

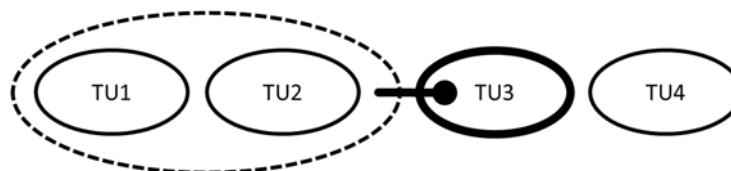


図 3 (1)の TS3 産出時の TU

通訳者は TU3 の訳出を行うため、TU1 および TU2 の内容を保持しつつ、これを参照することで非明示的な論理関係をとらえ、さらに TU4 の構築を進めている。図 3 のマッチ棒型の図形は一つの情報ユニットとして保持された TU1 および TU2 が TU3 により参照されていることを示す。TS4 の「ということで」(J021) は TU3 と TU4 を漠然と並列しているに過ぎないため、“which” (E020) は情報の単純な並列ととらえられていると判断できる。TS4 の産出は後続部分の処理と並行しているが図は省く。

ST に等価的要素のない指示表現「それ」(J020) の訳出には言語情報のコード的置換を超えた認知処理が認められた。本稿では、こうした指示表現の使用の背後で働く認知処理をまとめて、概念操作 O と呼ぶことにする。概念操作 O の特徴は (2) にまとめられる³。

- (2) a. 情報ユニットの構築
- b. ST の理解における役割
- c. TT の産出における役割

(2a) の情報ユニットの構築は、通訳者が指示表現の指示内容をひとまとまりの情報として把握していることを示す。ここでは TU1 と TU2 の二つの訳出単位がひとつの情報ユニットとしてとらえられている。これにより、先行情報の効率的保持が可能となるだけでなく、情報を対象化し、

操作することが可能となる。(2b) の ST 理解への役割は、ここで通訳者が非明示的な論理関係をとらえていることを示す。論理関係の把握には、二つの命題の保持が必要であり、情報ユニットが非明示的論理関係の把握に寄与している。(2c) の TT 産出への役割は、こうした概念操作の結果、「それによって」という訳出表現の選択が可能となったことを示す。

この概念操作 O の具体的内容は常に同じであるとは限らない。特に ST の理解における役割は場合によって様々であろう。(1) の「それによって」(J020) は ST の理解によって構築された概念を順送り処理にするにあたり、二つの命題の間の論理関係をとらえることで選択された表現であり、追加的指示表現はその一部として含まれていた。しかし、同時通訳の訳出に表れる指示表現の追加は常にこうした論理関係の把握に寄与しているわけではない。次に別の例を検討する。

(3) でも、ST では “where” (E062)、“which” (E062)、“where” (E063) と 3 回連続して関係詞が出現しており、順送りの訳出を実現するためにはこれらを分割の目安として活用するのが妥当である。ここでは「これ」(J062) と「この」(J064) が ST に等価的要素のない指示表現であり、これらが順送り訳に貢献している。

(3)

E 062	Another example	where	Japan has a	horse running	which	is the international
J 062	に拍車がかかっています。		もうひとつ例を挙げさせていただきますが	これは	日本	が
E 063	technology agreement	where		there may be		
J 063	アノー	参加している	進めていることですが	ITA 情報技術協定を	挙げる	ことができまして
E 064	step forwards available	if	the players U.S. EU	Japan	China	
J 064	この分野において	もしかしたら	前進のステップが	可能	かもしれません。	主要国のアメリカ EU

表 2 は (3) における SS と TS の対応である。

	SS	TU	TS
1	Another example	TU1	もうひとつ例を 挙げさせていただきますが
2	where Japan has a horse running	TU2	これは日本が参加して進めていることですが れども
3	which is the international technology agreement	TU3	ITA 情報技術協定を 挙げるができまして
4	where there may be step forwards available	TU4	この分野においてもしかしたら前進のステッ プが可能かもしれません

表 2 (3)における SS と TS の対応

まずは「これ」(J062) に注目する。この指示表現の追加は、命題と命題の関係把握のために使われているのではなく、TU2 に含まれる命題の一部となっているようである。ここでの TU の状態をたどってみよう。

SS1 は二つの単語からなる名詞句であるが、TS1 では節として訳されている。TS1 は SS2 聞きながら産出されていることから TU2 の構築はすでに始まっているが、この時点で TU1 は TU2 と分離して扱われていると判断できる。図 4 はこの時点での TU の状態を示している。



図 4 (3)の TS1 産出時の TU

次に TS2 では ST に等価的要素のない指示表現として「これ」(J062) が現れる。「これ」(J062) の指示対象は「もうひとつの例」(J062) であり、TU2 では保持された TU1 が参照されている。図 5 はこの時点での TU を示す。

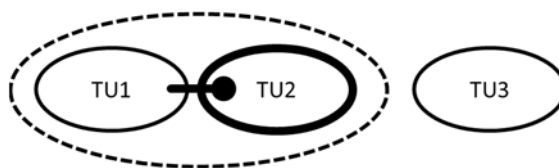


図 5 (3)の TS2 産出時の TU

「もうひとつの例」(J062) は TS2 の主部であるため、TU1 と TU2 は主述関係にあることになる。つまり、ST においては修飾部と被修飾部という関係にあった二つの情報項目を主題と題述の関係に組み直す処理が実行されている。この TU の処理は (1) の TU1 と TU2 の処理と同じである。異なる点は、(1) では TS1 産出の時点で TU1 を主題とすることが確定しており、後続する訳出表現に制約が働いていたのに対し、(3) の TS1 は後続する訳出を拘束しておらず、TS2 産出の時点で TU1 と TU2 の主述関係が作り出された点を指摘できる。(1) と同じように TU1 の処理の時点でこれを主題化していれば、TS1 を「もう一つの例としましては」などと訳出することも可能であり、だとすれば、追加的指示表現は使用せずに TS2 を産出することも可能だったのである。したがって、この指示表現は、訳出表現の産出計画のタイミングの差により誘発されたものといえる。

TS2 の「けれども」(J063) は、TU2 を補足的内容として扱いつつ、次の情報を並列することを示しており、TU1 および TU2 と TU3 はいったん切り離される。TS3 においても TU2 との関連は特にみられない。実際には TU1 と TU2 が消えてしまったわけではないだろうが、図 6 からは TU1 と TU2 を省略する。また、TS3 は節として訳出され、TS4 とは統語的な独立性が高いため、TU3 と TU4 は分離している。



図 6 (3)の TS3 産出時の TU

TS4 では「この分野において」(J064) という表現が使われている。「この」(J064) はふたたび ST に等価的要素のない指示表現の追加であり、TU3 が保持され TU4 で参照されていることがわかる。図 7 は TS4 産出時の TU を示す。



図 7 (3)の TS4 産出時の TU

SS4 の “where” (E063) は“the international technology agreement” (E062) を先行詞とする関係副詞である。TS3 と TS4 の関係は修飾部と被修飾部という関係ではなく、統語構造という点では異なるものの、TS4 の「この分野において」(J064) は先行内容の詳述という点においては同じ機能を果たしている。この点において、ここでの TU3 と TU4 の関係は ST で明示的に示された内容をほぼそのまま保持しているといえる。

ここでの概念操作 O の内容を振り返り、まとめておこう。情報ユニットの構築に関しては、TS2 における TU1 と TU2 のパッケージ化に明らかである。ST の理解における役割としては、TS2 の「これ」(J062) の訳出において、TU1 と TU2 を主述関係としてとらえた点、また TS4 の「この」(J064) の訳出において TU3 と TU4 の関係を先行情報の詳述としてとらえた点が指摘できる。TT の産出における役割は、それぞれの指示表現の使用そのものが訳出への貢献である。ただし、「この分野において」(J064) は TT を成立させるために不可欠な要素ではなく、削除することも可能である。TU の処理が行われていたとしても、ここで「この分野において」という表現が使用されない可能性もある。しかし、ここでこの表現が使用されたことにより、訳出の背後にある概念レベルでの処理の実態、すなわち、TU3 の保持および TU4 との関連付けがなされていることを確認することができる。

ちなみに、同じ機能を果たす訳出としては「そこでは」でも構わない。ここで「分野」(J064) という訳語が現れている背景には、この “the international technology agreement” (E062) が合意プロセスや協定そのもの、あるいは協定の条項などではなく、協定で扱われている産業のカテゴリーを指すという理解がある。この理解には “where” (E063) および “there” (E063) という〈場所〉に関わる表現がメタファー的に解釈されたことが関連している可能性もあるが、「分野」(J064) という表現はこれらの表現のコード的置換によって得られるものではなく、この理解は単なる TU の保持ではなく、概念レベルの操作が関わっていると言える。いずれにせよ、概念操作 O に含まれる三つの側面が順送り訳の実現に貢献していることが分かる。

3.2 統語的差異克服に関わらない指示表現追加

英語と日本語の間の通訳翻訳において順送りの訳が論点となるのは、情報の線形的処理のために統語的差異を克服するための努力が必要となるからである。上の例では、ST に等価的要素のない指示表現の追加が順送りの訳に貢献している例を見た。しかし、指示表現の使用は必ずしも統語的差異を克服するための努力が必要とされる場合に限らない。(4) における指示表現の追加を見てみよう。

(4)

- E 025 in an impasse. I don't think there is any way the big
 J 025 なりますので 大きな パッケージとしてのドーハ ラウンドは 行き詰まり状態になる
- E 026 twenty topic all or nothing single undertaking of the Round will unfold
 J 026 ということは皆さん既に ご承知 だと思えます。 二十 の トピックすべて エー 網羅
- E 027 any time soon. Does that mean that the WTO is
 J 027 したような一括受諾方式のドーハラウンドの妥結というのは近い将来は難しいというふうに見てお
- E 028 immobile? Frozen? No. There are many areas
 J 028 ります。だからといって エー WTO が全く凍結して動くことができない状態であるかと言うと その 答え
- E 029 where we still although we have to navigate in a very hostile international
 J 029 はノーであります。多くの分野においてエー WTO アノーは 無論 非常に

(4) において、「その答えはノーであります」(J028) は “No” (E028) に対する訳出であり、この「その」(J028) は ST に等価的要素ない指示表現に当たる。以下に (4) における SS と TS の対応を示す。

	SS	TU	TS
1	I don't think there is any way	TU1	
2	the big twenty topic all or nothing single undertaking of the Round	TU2	二十のトピックすべて エー 網羅したような一括受諾方式のドーハラウンドの妥結というのは
3	will unfold any time soon.	TU3	近い将来は難しいというふうに見ております。
4	Does that mean that the WTO is immobile? Frozen?	TU4	だからといって エー WTO が全く凍結して動くことができない状態であるかと言うと
5	No.	TU5	その 答えはノーであります。

表 3 (4)における SS と TS の対応

SS5 の “No” (E028) は一語で統語単位として独立しており、ことさら順送り訳のために分割単位を細かくしたり、組換えを行ったりする必要はない。TT では TS4 と TS5 が連結し一文が構成されており、むしろ「その」(J047) は分割単位を細かくするよりは大きくするために使用されているように見える。ここでの TU の推移を順に確認しよう。

SS2 の途中まで先行部分の訳出が続いている。この部分の訳出は SS2 から始まるため TS1 はない。TS2 の時点では TU2 を訳出しつつ TU1 を保持していたと判断できる(SS1 の訳出は TS3 に持ち越されている)。したがって、TS2 訳出時点での TU は図 8 の通り示せる。



図 8 (4)の TS2 産出時の TU

TS3 では、SS3 の情報が訳された後、保持されていた SS1 の情報が訳出される。これは逆送り訳である⁴。ここでの TU は図 9 で示せる。

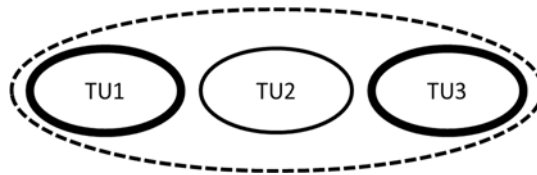


図 9 (4)の TS3 産出時の TU

図 9 で示したように、逆送り訳においては、先行する TU を長期にわたり保持し、活性化する必要がある。これは認知資源の活用という点から見て不経済である。しかし、この程度の逆送りは、実際の同時通訳においては珍しくない。保持される TU の数はどの程度の逆送りなら許容されるかを判断するためのひとつの尺度となる可能性がある。

SS4 の “Frozen?” (E028) は一語で独立した統語単位を構成しているが、TS4 を見ると、この情報は TU4 において先行部分と融合していることが分かる。さらに TS4 の「だからといって」(J028) は、ST にない非明示的な論理関係の把握であるため、先行命題の保持が前提となり、TU1、TU2、TU3 で構成された情報の保持が判断できる。また、この非明示的情報を訳出し、SS4 に含まれた情報を “WTO” (J028) から訳しはじめるとほぼ同時に、SS5 の “No.” (E028) を聞いていることから、TS4 を訳しつつ、TU5 の構築が進んでいたと判断できる。以上より、この時点での TU の状態は図 10 として示せる。

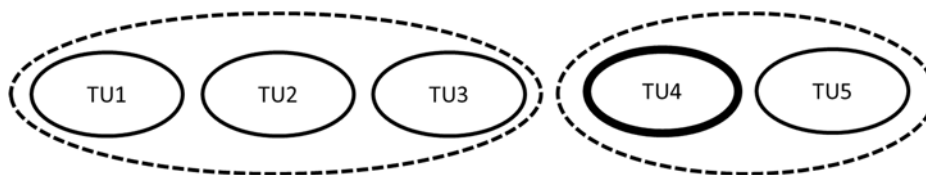


図 10 (4)の TS4 産出時の TU

TS5 は TS4 から続く文の結びとして訳出される。TU4 と TU5 は一体のものであり、TU4 は TU1 から TU3 の保持を前提としているため、TS5 の時点でも引き続き保持されていると判断できる。「その」(J028) は、ST に対応のない指示表現の追加であり、その指示内容は TU4 であるため、図 11 では TU5 から TU4 への参照関係を示す矢印が描き込まれている。また TS5 の訳出時点ではすでに後続部分の TU の構築も始まっているはずだが、これは (4) における検討事項ではないため、図 11 ではこれを省略する。

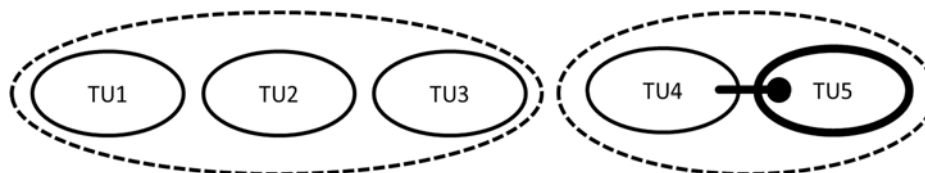


図 11 (4)の TS5 産出時の TU

「その答え」(J028) という表現は、TU5 の訳出において TU4 が保持されているということだけでなく、TU4 と TU5 の間の〈問いと答え〉という関係が把握されていることも示している。

ここでの指示表現追加の背後にも、概念操作 O と同等の処理、すなわち、情報ユニットの構築、ST の理解、TT の産出に貢献する認知処理が認められる。しかし、この操作は順送り訳の困難な統語的鏡面関係の克服に貢献しているわけではない。同時通訳における認知処理を一般的に考察するためには、こうした例を無視することなく、統一的な説明を目指すべきであろう。これについて次節で考察する。

4. 考察

本稿では ST に等価的要素のない指示表現の追加的訳出を手がかりに TU の展開という観点から順送り訳における認知的処理について分析した。では、指示表現の追加の背後にある概念操作が同時通訳の認知的側面において一般的に持つ意義とはどのようなものであろうか。以下では、この分析から得られる示唆を同時通訳における漸進的処理と逐次的処理という観点からまとめたい。概念的処理における段階的な深さの違いという観点が同時通訳の認知的研究における意義について述べる。さらに、こうした研究の枠組みとなる言語コミュニケーションの仕組みについて考察する。

4.1 概念操作 O の一般性

関係詞を含む構文など、順送り訳のために特別な処理が必要とされる例に注目すると、ST に等価的要素のない指示表現の使用は方略的な性質を帯びているように見える。しかし、指示表現の追加は統語的差異を克服するためのみに実行されるわけではない。順送り訳のために ST の構造を変える必要のない場合でも、指示表現の追加は見られる。概念操作 O は、統語的鏡面関係の克服が必要な際のみを発動するわけではなく、ディスコースを線状的に処理し訳出するにあたり、常に働いているのではないか。

概念操作 O が統語的差異の克服のために発動されたものだとすれば、概念操作 O は問題解決のための特別な操作であることになる。もしそうだとするなら、概念操作 O を伴う訳出プロセスは (5) で示せる。

(5) SS → 処理タイプ判断 → 概念操作 O → TS

ここでは概念操作 O に先立ち、処理タイプの判断が必要である。これは順送り訳のために統語的差異を乗り越える必要があるかどうかの判断である。この判断のためには、SS の構文解析を実行し、さらに仮想的な TS の構文と比較する必要がある。そのうえで SS と仮想的な TS の間に鏡面構造が検出された場合には概念操作 O を実行し、そうでない場合は通常処理を選択することになる。このプロセスにおいては、通訳者は処理タイプの判断のため、常に SS の構文と仮想的な TS の構文を参照せねばならない。実際の通訳においては、常に SS の統語構造を解析し、訳出の可能性を判断したうえで訳出表現を選択することは考えづらい。SS の統語構造に相当な注意を配分すれば、そのような判断が可能な場合はあり得るが、それが通訳作業の助けになるとは考えにくい。むしろ、こうした判断は起点言語に関する過度の注意を要求し、通訳の妨げとなるだろう⁵。それよりは (6) のプロセスを考えるほうが現実的である。

(6) SS → 概念操作 O → TS

順送りであろうが、逆送りであろうが、訳すためには ST を分割し TU を構築することが必要である。訳出済みの TU を後続する TU において活用する際には常に概念的な参照が実行される。このような CC モデルに基づいた同時通訳観からは、TT への指示表現の追加は概念操作 O の反映と説明できる。そこで、本稿では (7) を仮説として示す。

(7) 同時通訳において、順送り訳に必要な認知処理は、訳出困難となる統語構造に出会った際の問題解決のために発動するのではなく、常に働いている。これを持続することができれば、二言語間の統語的差異を乗り越え、順送りに処理することができる。

指示表現の追加は、ディスコースを線状的に処理する通常のあり方を反映するものであり、順送り訳もそうした通常処理の範囲で対応可能である。順送り訳は特別な訳ではない。どのような

指導や訓練により、この処理能力を身につけることができるのかという点は、これから探究すべき課題である。しかし、順送り訳という観点から訳出を吟味することは、通訳の本質について考察し、通訳に必要な処理を実感する機会となるだろう。これこそが、サイト・トランスレーションなど、順送り訳を通訳訓練の現場でとりあげる意義といえる。

4.2 漸進的・全体的処理と逐次的・部分的処理

ST に等価的要素のない指示表現の訳出への追加の背後にある概念操作 O の特色として、本稿では以下の 3 点を指摘した。

- a. 情報ユニットの構築：ST に等価的要素のない指示表現の追加は、先行情報がパッケージ化され、情報ユニットとして使用されていることを示す。情報ユニットの内容は単独の TU の場合もあれば、複数の TU がまとめられることもある。
- b. ST の理解における役割：情報ユニットにより情報の対象化が可能となる。対象化により、主述関係の構築や論理関係の把握など、概念間の操作が可能となる。
- c. TT の産出における役割：情報ユニットによって可能となる概念間の参照関係より指示表現の選択が可能となる。また、概念間の理解に応じた表現も選択可能となる。

すでに述べた通り、概念操作 O は統語構造の壁を乗り越えるための方略というよりは、同時通訳において常に働く認知処理の一部であるように思われる。だとすれば、ここにはオンラインのディスコース処理の一般的特色が反映しているのではないか。

概念操作 O は、漸進的・全体的処理と逐次的・部分的処理の二つの側面でとらえることもできる。SS を画定し、そこから TU を構築する処理は ST の部分的処理であり、逐次的に実行される必要がある。一方、情報ユニットの構築と活用はディスコースの先行部分を後続部分の理解に取り入れる働きの一部であり、部分的処理を超えたディスコース全体の理解に関わる。この全体的処理は時間軸の流れに沿って、徐々に展開していくものであり、漸進的処理でもある。TT の産出に目を向けると、訳出における指示表現の使用は、個々の TS の産出に関わる逐次的・部分的な処理であるが、TT 全体の結束性・一貫性を実現するために使用される側面もある。概念操作 O は、同時通訳作業における漸進的・全体的処理と逐次的・部分的処理の交差点であり、TT への指示表現の追加は ST の情報を切りつつ繋ぐ役割を果たしているのである。

4.3 概念操作の段階的深さ

本稿で提示したモデル (図 1 参照) における SS から TU への処理と TU から TS への処理は、それぞれ概念化と言語化の処理である。これら二つの処理が一つの概念を介して実行されることは一般的な言語コミュニケーションにおいてはまれである。聞き手としてコミュニケーションに参加する場合は、相手の話す内容を概念化のみで足りるし、話し手となる場合は自分の概念を言語化することに専念すればよい。同時通訳作業においては、概念化と言語化が並行する。概念操作に段階的な深さがあるとすれば、この深さの調節は同時通訳作業における重

要な論点となる可能性がある。

本稿では ST に等価的要素のない指示表現を手がかりに TU の扱いを分析した。今回の分析は TU と TU の関係の把握を中心としたものであった。ST において関係詞で接続された情報が、項目間の主述関係や命題間の論理関係ととらえられる場合がある。ディスコースをテーマ・レーマの連鎖ととらえるなら、先行詞を直前のレーマの一部ととらえ、関係詞節の主題・題述構造は、関係詞をテーマ、関係詞節をレーマと見なすのが機能主義の基本的な考え方である (Halliday & Matthiessen, 1985)。だとすれば、関係詞はそもそも指示的な性質をもつと考えられ、関係詞節を訳出する際、指示表現を主題とする主述構造を選択するのは自然であるし、これは順送り訳の妥当性に関する説明として有効であろう。しかし、本稿の目的はこうした訳出の背後にある認知処理の記述にあり、関係詞節が修飾部と被修飾部という統語的置換で訳出されていないという点に目を向ける。テーマ・レーマ構造はテキストの持つ機能的側面であり、統語情報とは異なるレベルにある。これを表すことのできる構文は多様である。修飾・被修飾の関係を表す統語構造を捨て、概念的なレベルに一步踏み込むことにより、同じ関係を主部と述部として表すことができる。こうした訳出が可能となるということは、TU と TU の関係は概念レベルにおいてはそれほど固定されておらず、これを言語化するための操作において決定される側面があるということだ。これは内容の確定した概念と概念の間の操作に過ぎず、概念内容の確定と比較すれば、それほど深い概念操作ではないが、こうした操作を経た訳出は ST と TT の間に表面的な違いをもたらす。

Levelt (1989) は概念から音声発話をなすための認知処理のモデルを提示し、この中で概念化装置と形式化装置を想定している。音声化すべきメッセージは概念化装置の中で形成されるが、この処理は発話行為論でいう発語内行為を決定し、これをゴールとサブゴールに振り分けるマクロ的計画と、聞き手に伝えるべき情報の情報構造などを決定するミクロ的計画の二つに分けている。ここでは流動的な概念を言語化するにあたり決定されねばならない要素が指摘されており、概念の構成要素(実体と関係、主述構造、視点、モダリティ・アスペクト・ダイクシス)の選択とその線形化の方法が取り上げられている。Chafe (2018) は、別の観点から思考の言語化に関わる問題を取り上げ、思考が意味構造、統語構造を経て、記号となり、これが抽象的音韻、表示的音韻論を経て音声となるというモデルを提示したうえで、意味構造に至る手前の思考のプロセスを選択、範疇化、定位、結合の 4 段階で記述している。Chafe (2018) も流動的な概念を言語化するにあたり決定せねばならない要素を指摘している点では Levelt (1989) と共通するが、違いとして注目すべき点は、Chafe (2018) では概念から言語化に至る処理が論理的順序で示されている点であり、ここには概念レベルにおける処理に深さの違いがあるという主張が含まれているように読める。

TU は同時通訳の順送り処理における時間の展開を関係するため、線上の時系列で示されるが、発話・産出という言語活動を離れた概念はこのような線形性は必要とされない。その点から、TU は離散的な言語表示と流動的な概念表示をつなぐレベルでの心的表示であるということもできる。一方、本稿では扱わなかったが、より深いレベルの概念処理が通訳のコミュニケーションの根底にあるとすれば、言語類型の違いに起因する思考の差異のようなものもそこに吸

収することも可能となるだろう。

4.4 言語・思考・世界

同時通訳における概念操作 O の働きは、通訳とは二言語間のコード的置換ではないという主張を裏づけるとともに、言語コミュニケーションにおける言語と思考と世界の関係についての示唆を含む。本稿で見た指示表現の使用は、言語とは意味と形式の結合であり世界内の対象を指示するという考え方と相いれない。ST に等価的要素のない指示表現の背後にあるのは言語情報の処理のために働く概念であって、言語使用者の外の世界に存在する指示対象ではない。また、言語についての言及の場合を除けば、指示の対象は言語表現そのものでもない。情報ユニットは、言語情報のパッケージ化により生み出されるが、単なる言語情報の蓄積ではなく、各種の認知資源も含み、概念的な要約処理を伴う。

言語記号の本質を意味と形式の結びつきと見るのはソシュール以来の伝統であるが、言語を抽象的な体系ではなく、実際の使用を含めとらえるためには、言語記号による指示の本質、すなわち、記号と指示対象の結びつきを考慮する必要がある。そのためには、ひとまず Ogden & Richards (1923/1989) の提示した意味の三角形の各頂点に記号・思考(あるいは指示)・指示対象が配置されていたことを思い出すと役に立つ。本稿で見た指示表現の訳出への追加の場合、その指示対象は世界内の実在ではなく、ディスコース内の情報である。ここから指示表現には 2 種類あり、あるものは世界内の対象を指示し、あるものは概念を指す、という考え方もできるだろう。しかし、Jackendoff (1984, 2012) によれば、言語とは常に概念を参照するものであり、指示対象とは情報の集合として概念化された心的表示である。概念化されないものは指示できない。この立場に立てば、指示表現の本質は世界と言語表現の関係、あるいは言語と言語の関係ではなく、常に言語と概念の関係である。これは指示表現に限らず、言語一般の問題でもある。認知的立場に立てば、言語による指示は、世界内の事物と言語表現の対応ではなく、話者の構築する概念と言語表現の対応としてとらえられる。

言語レベルとは別に概念レベルの処理があり、言語使用には常に概念レベルの処理が伴う。本稿で考察した概念操作 O はその一例である。さらに、時系列に沿って言葉を理解することの前提には、言葉は時系列に沿って産出されるという事実がある。言語を産出と理解の両面から見るということは、コミュニケーション一般の問題から言語を考えることでもある。この観点を取り入れることは、コミュニケーションの一形態として通訳を考えることにつながる。こうした見方からすれば、本稿の議論は言語コミュニケーションの概念-意味相関モデル (船山, 2020) の枠組みの中に位置づけられるだろう。

5. まとめ

原発話にない指示表現の訳出は、単なる訳出のゆらぎではなく、通訳作業の本質を垣間見するための貴重な手がかりであり、そこには順送りの訳を実現する三つの処理、分割・保持・組換えのすべてが現れている。これは、通訳者による ST の漸進的・全体的処理と逐次的・局所的処理の合流点を示す。こうした指示表現の追加を観察することにより、通訳者がどのような TU

を構築し、どのように操作しているかを探ることができる。

本稿で示した TU の展開は水面下の認知処理に属し、通常、通訳者によって自覚されるものではない。ソシュール以来、言語を意味と形の組み合わせとしてとらえるのは近代言語学の前提であるが、Jackendoff (2012) によれば、言語の意味は意識の外にある。つまり、意味は我々の心の中にあるが、我々はその内実である概念構造や空間構造を直接的に知覚することはできず、我々が意識できるのは、言葉の音とその音が「有意味である」という感覚だけである。だとすれば、通訳者の意識できるものも ST と TT の形式および有意味性の感覚のみであり、概念を直接的にとらえることはできない⁶。しかし、こうした意識外の働きは常に同時通訳の根底にあり、人間の言語処理の実際を考察するためには無視すべきでない要素である。

近年の通訳翻訳の認知プロセス研究では、視線計測や打鍵記録など、通訳者・翻訳者の身体的・生理的反応からデータを取得する一連の心理学的・実証的研究が主流となっている。身体的反応や生理的反応をデータとする手法は、通訳翻訳の認知的研究におけるモデルの検証などにおいて重要な意義を持つ。しかし、言語表現は、それ自体、話者の認知状態の反映であり、同時通訳記録には通訳者のオンラインの認知処理に関する具体的な情報が含まれている。本稿では、原発話に対応表現のない指示表現の訳出に注目し、その背後にある概念の操作を指摘することにより、通訳翻訳の質的研究のもつ可能性を示した。

【謝辞】

本研究の遂行に当たり日本通訳翻訳学会「順送りの訳」研究プロジェクトの研究会にて貴重なコメントをいただいた。メンバーの皆様にご心より感謝する。また本稿は、科研費基盤研究(C)『同時通訳における認知処理の明示化：全体的処理と部分的処理の統一的記述』(研究課題番号:20K00795、代表:石塚浩之)の成果の一部である。

【著者紹介】

石塚浩之 (ISHIZUKA Hiroyuki) 広島修道大学教授。専門は通訳翻訳研究。

【註】

1. 通訳データベース(JNPC コーパス)の詳細については松下・山田・石塚(2020)を参照。
2. 本稿の主旨は通訳データの量的分析ではないが、参考として分析データに含まれた指示表現の分布についてのデータを示す。

[記者会見日付] 2012年3月16日 [原発話者] パスカル・ラミー-WTO 事務局長

[動画全長] 0:40:13 うちメインスピーチ 0:01:23-0:10:08

TT 指示表現の使用(ST に等価的要素が無/有)合計: 6/19

これ: 2/3	それ: 1/2	あれ: 0/0
この: 1/5	その: 2/5	あの: 0/0
こう: 0/1	そう: 0/3	ああ: 0/0

3. 指示表現追加の背後にある認知処理として、石塚 (2016) でも同様の指摘をしている。石塚 (2016) では、この処理と作動記憶との関連などについても言及した一方、順送り訳との関連は考察していない。
4. TS3 を「近い将来は難しい」(J027)、「というふうに見ております」(J027) に分け、TU3 から TU1 への活性状態を別の図で示せば、逆送り処理が際立つ。あるいは CC の流動性に注目し、TU1 は TU3 と融合していると考えてもよい。これは分析の細密度と視点の違いであり、本稿の主旨には影響を及ぼさない。ちなみに、逆送り処理には先行情報の保持が必要となる。この点に着目し、逆送り訳を手がかりに通訳者による情報保持を分析することもできるだろう。
5. ここには通訳において方略と呼ばれるもの的一般的問題がある。方略とは選択可能な処理であり、その採用に当たっては採否判断が必要である。翻訳の場合、このような判断が働く余地はある。しかし、瞬発的な対応が必要な通訳の場合、意識的であろうが無意識的であろうが、方略的対応の働く余地は限られているのではないか。
6. Jackendoff (1984, 2012) では、言語的意味を概念に含まれるとし、多くの場合、一体として扱っている。意味および概念の位置づけはさておき、これらを言語使用における形式以外の部分とするならば、ここでの主張はCCにも当てはまる。

【引用文献】

- Chafe, W. (2018). *Thought-based linguistics: How languages turn thoughts into sounds* : Cambridge University Press.
- Funayama, C. (2007). Enhancing mental process in simultaneous interpreting training. *The Interpreter and Translator Trainer*, 1(1), 97-116.
- Halliday, M. A. K. & Matthiessen, C. M. I. M. (2004). *Introduction to functional grammar*. (4th ed.). London/New York: Routledge.
- Jackendoff, R. (1984). *Semantics and cognition*. Cambridge: MIT Press.
- Jackendoff, R (2012). *A user's guide to thought and meaning*. New York: Oxford University Press.
- Lederer, M. (1978/2002). Simultaneous interpretation: Units of meaning and other features. In F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp.130-140). London/New York: Routledge.
- Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge: MIT Press.
- Ogden, C. K. & Richards, I. A. (1923/1989). *The meaning of meaning: A study of the influence of language upon thought and of the science of symbolism*. Florida: Harcourt Brace Jovanovich.
- Vinay, J-P. & Darbernet, J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology*

- for translation* (translated and edited by Juan C. Sager & M. J. Hamel).
Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ishizuka, H. (2013). *Conceptual processing in English-Japanese simultaneous interpreting*
(Doctoral thesis, Kobe City University of Foreign Studies, Kobe, Japan).
- 石塚浩之 (2016) 「同時通訳における情報ユニットとしての心的表示」『広島修大論集』56(3): 31-48.
- 船山仲他 (2000) 「同時通訳の認知的側面を構成する要素について」宮畑一範(編)『同時通訳における情報フローの認知言語学的検証』(平成 10-11 年度文部省科学研究費報告書 基盤研究(C)(3) 10610518) 3-26. 大阪府立大学
- 船山仲他 (2020) 『自然言語をめぐる秩序 言語化と概念化』(開拓社)
- 松下佳世・山田優・石塚浩之 (2020) 「英日・日英通訳データベース(JNPC コーパス)の概要」『通訳翻訳研究への招待』22: 87-94.
- 南津佳広 (2002) 「同時通訳における照応関係の構築: 指示表現「そういう」をてがかりに-認知語用論的観点からの統一的説明」『通訳研究』2: 43-62.

